



- 体育会名：関西学院大学体育会ラグビー部
- 創部年：1928年(昭和3年)
- 2025年度会員数：132人(4年30人、3年31人、2年35人、1年36人)

□ 同窓倶楽部名：関西学院大学体育会部ラグビー部同窓倶楽部  
\* 関西学院同窓会 公認団体

- 同窓倶楽部通称：蒼鷺会
- 設立年：1933年(昭和8年)頃
- 会員数：1271人(男性1193人、女性78人)  
\* 物故者含む

関西学院のラグビー史は、1899(明治 32)年慶應義塾での日本ラグビー発祥から遅れること十数年、1912(明治 45)年 9 月に、カナダのマウント・アリソン大学在学中ラグビー選手であった青年教師、アウターブリッジ,H.W.(後の関西学院第 7 代院長)の呼びかけに応じた学生約 30 人による原田の森グラウンドでの練習が、その起源とされる。

18 年 2 月には、神戸の外国人倶楽部であるKR & AC(Kobe Regatta & Athletic Club)と初の対外試合を行い、その後も各運動部混成メンバーで活動を継続する。28年初めには神戸東遊園地に青山学院を迎え、6-5 と勝利を収める。この第 1 回定期戦以来、青山学院との交流は現在まで脈々と受け継がれていくことになる。

そして同年春、待望の運動部加盟を果たし、部長今田恵・主将天野亮・マネージャー牧野新一の下、ここに正式に関西学院ラグビー部が誕生した。

創部以降、黎明期にもかかわらず、早くから関西の強豪校に勝利を収め、30 年の第 5 回全国高専大会では決勝へと駒を進めるなど、その活躍は「新興ながら関学あり」と周囲の目を引きつける目覚ましきであった。32年、関西学院大ラグビー部の名称となってから、その勢いは加速した。当時、関西を牽引していた京大、同志社を目標に精進を重ねた結果、創部から13 年目の 40 年、9-8 の接戦で同志社から初勝利を挙げると、2 年後には京大にも初勝利。「関西 3 強時代」を形成していった。

戦争による活動停止の明けた、戦後に黄金期を迎える。46年は立命館には敗れるも、同志社、京大を撃破。47年元日の東西大学対抗戦では、強豪明大に21-14で逆転勝利を収めた。47年は同志社、京大、立命館のライバル校を撃破して初の関西制覇を果たすと、東西

大学対抗戦でも関東王者の明大を 26-12 で破り、初の“全国制覇”を成し遂げた。

47年から51年まで関西5連覇を果たし、早大、明大ら関東の強豪大学と日本一の座をかけて戦うまでに上り詰め、大塚卓夫、南(旧姓貝元)義明、高岡晃一、堀川(旧姓齊藤)文男ら、日本代表経験者を相次ぎ輩出するに至った。61年1月9日には早大を8-6で下して初勝利を挙げるなど、その隆盛は 60 年代初頭まで続いた。

だが、盛者必衰は世の理、ここから苦難の道を歩むこととなる。同志社、関大、甲南大、立命館、京大、天理大との7校による現関西大学リーグの前身となるブロック制が採用された63年を1勝5敗の7位で終わると、翌64年から始まった関西大学リーグでは初年度こそ4位に入ったものの、以降は下位に低迷。70年には初の最下位を経験、入替戦で立命大に敗れBリーグ転落という屈辱を味わった。76年の入替戦に勝ち、Aリーグ復活を果たすも、わずか4シーズンで再びBリーグに降格。推薦制度の廃止などによる戦力低下に加え、京産大や大体大といった他大学の台頭も相まって「名門・関学」のブランドは地に墜ちた。以後は入替戦に進むもAリーグの壁に阻まれ続け、94年にはBリーグで最下位、続く大産大との入替戦にも敗れ、遂にCリーグへの降格まで経験することになった。96年、翌年からのリーグ再編に伴いCリーグ上位2校がBリーグへ自動昇格することになったこのシーズン、関学は2位に滑り込み、2年ぶりのBリーグ復帰を果たす。

また、98年5月には“関西学院ラグビーカーニバル”を初開催。中・高・大の全関学ラグビー部が一堂に会するこのイベントは、現在では初等部のほか近隣ラグビースクールなども招いて実施され、関学ラグビーファミリーの発信による競技の振興と地域貢献の一環として、ゴールデンウィークの恒例行事に定着している。

Bリーグ復帰3年目の99年は8勝1敗でリーグ制覇。摂南大との入替戦は15-24と9点差での敗戦であったが、既にAリーグが射程圏内にあることを実感した。

70~90年代を暗黒時代と表現するならば、2000年代は関学復活を印象づけた時代だろう。01年は10チーム制となって初のBリーグ全勝優勝、入替戦では大経大に5点差で敗れて再びAリーグの壁に阻まれたものの、マスメディアを含めた関西ラグビーファンの中で、関

学の A リーグ昇格を待望する声も聞かれるようになった。

02年、遂に積年の想いを遂げることとなる。リーグ戦を8勝1敗の2位で勝ち進むと、2年連続となった大経大との入替戦では展開ラグビーが結実し、42-26という大差で勝利。長い低迷期を脱し、23年ぶりのAリーグ復帰を掴み取った。

主戦場を A リーグに戻してから、“古豪関学”の復活は加速していく。初年度の03年は5位に入り、全国大学選手権に初出場。1 回戦で早大に大敗を喫したが、全国で戦うという目標が明確なものとなっていった。大学の指定強化クラブとなった06年、人工芝グラウンドが完成した07年は、いずれも関西リーグ5位で大学選手権に連続出場を果たすなど、着々とその実力を蓄えていった。

創部80周年の節目となった08年。牟田至監督、室屋雅史主将の下、リーグ初戦で同志社から49年ぶりの勝利を収めると快進撃を続け、天理大との最終戦も39-0で快勝。実に51年ぶりの関西王者、現行リーグ戦制では初の頂点に君臨した。大学選手権では2回戦で法大に敗れたものの、“古豪関学”の復活を全国にアピールした。

翌09年も強力 FW と快速 BK を武器に無敗でリーグ戦を制し、関西連覇を達成するも、大学選手権では 2 回戦で明大の前に屈した。

10年代に入ると安定した戦績で、10年の関西リーグ2位を皮切りに、毎年コンスタントに大学選手権への出場を果たす。特に14年度は野中孝介監督、鈴木将大主将の下、リーグ全勝で5年ぶりに関西を制覇。満を持して大学選手権に臨むも、関東勢の壁は高く、またしても国立競技場への道を断たれた。15年以降、関西リーグでは中位から下位に甘んじ、大学選手権出場を阻まれるも、その間も徳永祥堯、西川征克、岡部崇人といった日本代表選手をはじめ、国内最高峰カテゴリーであるラグビーリーグワン(旧トップリーグ)へと卒業生を輩出し、日本ラグビー界における関学の存在感は高まっていった。

20年からは、関学高～大学を卒業後、トップリーグでのプレー経験も持つ小樋山樹監督が就任。学院と体育会のモットーである“Mastery for Service”と“NOBLE STUBBORNNESS”の精神を体現し、社会で活躍する人材になること、多くの人に勇気と感動を与え、愛し愛される

チームになることを目的に掲げ、日々活動が続いている。

□ラグビー部 部史 編集担当者 山本一平(H8)